ここがぼくの居場所

水無翔

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年と先生の、とある春の日のお話。メリバ短編。

目　次

ここがぼくの居場所 ―――― 1

ここがぼくの居場所

放課後になると、ぼくは先生の家に向かう。先生といっても教師ではない。そう呼んでほしいと注文されたから呼んでいるだけで、実際の彼女は大学院生だ。けれど勉強を教えるのは本当に上手で、おかげでぼくは先生と出会った小学三年生の春以来、テストでは満点しか取ったことがない。

先日に入学した中学校は、去年まで通っていた小学校とは少し離れた位置にある。だから先生の家まで迷わずたどり着けるのか少し不安で、そんな感情を紛らわすために、歩きながら先生のことを考えていた。ぼくの大好きな先生のことを。

背中まで伸ばした艶やかな黒髪。身長も高くて、百七十センチはあるだろうか。ぼくとは二十センチ以上も違う。ほんとうに、とてもきれいで……ああダメだ、先生のことを考えるといつも胸がうるさくなる。逆に落ち着かなくなってしまった。そうだ、今日は何をするのだろう。本を読むのだろうか、勉強をするのだろうか。それともお菓子を食べるのだろうか。

春の陽気をからだいっぱいに吸い込んで、息を整える。ぼくの顔は青くなったり赤くなったり、はたから見ればちょっと面白いことになっていただろう。そうやって一人で

百面相していれば、もう先生の家だ。
先日の入学祝いで先生から貰った帽子をきっちり被り直す。ちょっと背伸びしてチャイムを鳴らすと「はーい」という返事が足音と共にやってきた。
ドアが開き、甘い香りをまとった先生が笑いながら顔を出す。その笑みに、ぼくの胸はまたうるさくなる。
「鍵は渡してあるんだからそのまま入ってきていいって言ったでしょ」
「い、一応、です。礼儀は大切だって先生も言ったじゃないですか」
「あら、合鍵を持っているのにわざわざチャイムを鳴らして玄関まで呼びつける方が礼を失していると思わない？」
「う、それは……」
たしかに僕は合鍵を持っている。お守りとして常にポケットにいれているくらいだ。でもだからと言って……それを当然のように使うのはまだ恥ずかしい。
「なんてね冗談よ。でも次は必ず鍵を使ってね。さあ上がって、クッキーが焼けているわ」
先生はぼくを招き入れ、家の鍵を閉める。するとおもむろにしゃがみ込み、ぼくの服をたくしあげた。そして、慣れた手つきでわき腹に触れる。
「まだ消えてないのね、痣」

六日前にできた、わき腹の痣。もう痛みはないけれど、それを撫でる先生の指が冷たくて一瞬身を竦めた。
「きっと痛いわよね。ママとパパはまだあなたを?」
「うん……二人とも、痣くらい気にしてなんてくれないから」
先生は服を戻すと、続いて右手でぼくの頬を包み込むように撫でた。親指が眦をかする。
「私とずっと一緒に居なさい。守ってあげるから。他の誰にもあなたを傷つけさせない」
頬を支える先生の手に、すこしだけ力が入ったのを感じる。
「大丈夫だよ。まだ大丈夫」
ぼくが繰り返すと、先生はちょっと目を細めてから手を下げた。
「――そう。さ、いい加減リビングに行きましょう。でもその前に」
「わかってます。靴をそろえてスリッパを履く。手を洗ってうがいもしっかり、でしょ」
「家の中なのだから帽子も脱いでね。荷物もおろして。コートは……着てないからいいわ」
言い切ると、先生はくるりと踵を返す。後ろ姿で気づいたが今日の先生はポニーテールだ。先生が髪をまとめているのは珍しくて、つい見入ってしまう。

熱くなった頬を抑えながら、なるべく先生の方を向かないで洗面所へ行く。
そして数分後、ぼくは一連の行動を終わらせてリビングのソファに腰を下ろした。
いただきます、唱えてクッキーにかじりつく。
「どう？　美味しい？」
「はい、とっても」
「よかった！　頑張って作った甲斐があったわ」
先生はニコニコと笑いながらぼくがクッキーを頬張る姿を眺めている。
その視線が妙に落ち着かなくて、誤魔化すように先生に質問する。
「そういえば、今日はいったい何をするんですか？」
「ん。今日はね、まずは本を読むわよ。ちょっと待ってね……はいこれ」
一旦離席した先生が取ってきたのは……『注文の多い料理店』。
「読み終わったら教えて。ゆっくりでいいわよ」
その言葉に従ってぼくは渡された本を読み始める。周りの音が聞こえなくなり、物語の中へと入り込んでいく。
――――――。
「読みました」
「お疲れさま。そしたら質問をするわね」

「いつものですか」
「ええ、いつもの質問よ。登場人物の中で先生に一番似ていたのは誰？」
『白熊のような犬』、だと思います」
「それはどうして？」
「……最後にぼくを守ってくれるのは先生だから」
『先生に一番似ていたのは誰』か。この質問は先生から渡された本を読んだ際に必ず聞かれるものだ。質問の意図は分からないし、聞いても教えてくれない。けれどいつも聞かれているから慣れてしまったし、今ではどの本を読むときも先生のことを考えるようになった。
「――そう。『犬』ね。それじゃあ、『山猫』はママやパパ？」
「ううん……二人とも、そこまでのことはしないよ」
「本当に？　そう思いたいだけじゃなくて？　ただの願望じゃなくて？」
「え、と」
突然強い口調となった先生にびっくりして、うまく口がまわらない。
「……いえ、まあいいわ。さて、それじゃあ勉強でもしましょうか。前回教えた部分の復習問題をつくったから解いて。さあ早く鉛筆を出して」
「う、うん。はい」

先生が二十センチほどの細い竹棒を取り出した。この棒は、いつも先生が勉強を教える際に使うものだ。これを持つ先生を見るのは、すこし怖い。

言われた通りに問題を解き始める。急な展開にちょっと動揺していたが、しばらくして落ち着いた。目前の問題を解く。

――鐘の音が聞こえた。五時のチャイムだ。

「あら、もうこんな時間なのね。なら仕方ないわ。今日は帰りなさい。解説は次回ね」

「ふう……はい。今日はありがとうございました」

クッキーを食べるだけかと思えば、存外に忙しい一日だった。

席を立って荷物をまとめる。先生が玄関先まで見送りに来てくれた。

「ねえ、最後に一ついい?」

靴を履くぼくに、先生が問いかける。

「はい」

「あなたがママとパパのことをまだ信頼しているのだったら、二人と話してみなさい」

「ぼくの話なんて聞かないよ」

「それでも話してみなさい。私の言う通りにするの。そうしなきゃ守ってあげられないから。それとも先生なんていらないのかしら。ならもう――」

「――ダメ!」

大きな声だった。自分で出したとは思えないほどの、大声だった。
「それだけはダメ。いなくならないでっ、なんでもするから」
「――そう。じゃ、がんばってね」
それだけ言うと、先生はぼくを外に追い出して鍵をかけてしまった。
迷ったけど、チャイムを鳴らすのはこわくて、そのまま先生の家をあとにした。
はやく先生の言う通りにしないと！
その思いがぼくを走らせる。どれだけ走ったのか、気が付くと自分の家の前だった。
いちおうまだ、ぼくの家だ。鍵を開けて中へ入る。
リビングを覗く。ママはお酒を飲んでいる。いつものことだ。
日の跨ぐまでに、パパが帰ったことはない。いつものことだ。
ぼくも、いつものことならママを見ないようにする。けれど今日は違う。こわいけど、こうしないと先生に見捨てられてしまうかもしれないから、意を決してママに話しかける。
「ママ」
「うるさい」
「ねえ、話を聞いて」
「いま忙しいの。静かにして」

「すこしだけでいいから」
「うるさいって言ってるでしょ！　もう黙って！」
ガツン、と大きな音がした。目が回って、視界の端に赤いものが映る。力が抜けて座り込んでしまった。きもちわるい、ひどい頭痛。触れると、ぬるりとした感触。震えながら手を見て、そこでようやく、ぼくは自分が出血していることを理解した。ママの手にあるビール瓶で殴られたことも。
吐きそうだ。ママが何か言いながらこちらを覗くのがわかる。
痛くて痛くて泣きそうだったけど、それよりママの方がこわくて、ぼくは家を飛び出した。
はじめて殴られた。先生のとは違う、ただの暴力だ。
走った。走って、先生の家まで戻ってきてしまった。もうここ以外に居場所なんてないから、ぼくはここに来るしかない。
ポケットの合鍵を使って家に入った。靴をそろえる。手を洗ってうがいもしっかり。帽子も荷物もコートもないから、それはいい。全て終えると、ぼくはリビングへ向かう。
リビングでは先生がソファに座っていた。様子は先ほどと全く変わっていなくて、机にはぼくの解いた問題用紙と竹棒、そして救急箱が置いてある。
先生はぼくを見ると、側までやってくる。けがの様子を把握したようだった。

「痛かったわね。すぐに包帯を巻いてあげるわ。」
「……うん」
「でもあなた、私の注文を守らなかったのね」
「え、いや……あ、ちがくて、スリッパは」
わき腹に鋭い痛みが走る。何度経験しても慣れない、竹棒による痛みだ。
「あなたが悪いのよ。あなたが言いつけを破ったから。」
「ごめん、なさい」
痛むわき腹を抑える。そうだ、ぼくが悪い。先生の言うことを守らなかったぼくが悪い。
「先生のこと、ママやパパと同じだと思う?」
「ううん。それは違う。先生は絶対に意味のない暴力を振るわないから。先生がぼくを傷つけるのはぼくが悪かったときだけだから。ずっとそうだったから。意味もなくぼくを殴ったあいつとは違うよ。ねえ先生、ぼくにはやっぱり先生しかいないよ。先生の言う通りあいつは『山猫』だったんだ。ねえ、ぼくにはもうここしかないんだ。ここがぼくのお家だよ」
「――そう!　やはりあなたは良くできた子だわ。さあ、頭を見せて」
言葉に従って頭を傾けると、先生は優しく包帯を巻いてくれた。

一気に喋ったせいか、頭がふわふわしてきた。

「ここからずっと北に行った山奥にね、先生の実家があるの。お料理屋さんなのだけどね、すごく美味しいのよ。そこへ行きましょう。そこでずっと先生と一緒に居るのよ」

興奮気味の先生の話を、ぼくはふらつく頭で聞いていた。中学校はどうするのだろうと思ったけど、きっと大丈夫。先生の言いつけで友達は作っていなかったから、ぼくが居なくなったところで誰も気にしない。だからもういいんだ。ずっと先生と一緒に居たい。先生に全部任せれば上手くいく。先生の注文に従っていれば、間違えることなんてないんだから。

――ああでも、なんで先生は包帯を用意できたんだろう？

そこまで考えて、ぼくの意識は途切れた。